

## 筑波大学医学医療系 耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療グループ



### 和田 哲郎

筑波大学医学医療系耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療グループ 准教授

### 原 晃

筑波大学医学医療系耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療グループ 教授

#### 沿革

筑波大学は、1971年に筑波新大学に関する基本計画が発表され、1973年に国立学校設置法等の一部を改正する法律（いわゆる筑波大学法案）が国会を通過し創立が決定した。東京教育大学を母体とするが、それまでの東京教育大学に医学部はなく、単なる移転ではなく新しい大学、医学部を作るという理想を掲げ、当時、田中角栄首相の列島改造政策の一環として開発されつつあった筑波研究学園都市に改めて創立という形がとられた。医学専門学群（現在は組織改編により医学群医学類に改称）という名称はほかにはみられないものであるが、筑波大学では学部と講座制を廃止し

新しい医学教育を行うという設立の理念の下、この名称が用いられ現在まで受け継がれている。同時に、附属病院では診療科間の垣根を取り払う目的で医局をなくしたため、各診療科においては教室という名称を用いず、診療グループという名称でグループ長（教授）を中心にそれぞれの専門的診療を行っている。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療グループでは、信州大学から吉江信夫が初代の教授として着任した。

1988年に草刈潤が第2代教授に就任し、現在の基礎を築いた。研究では内耳性難聴の解明に取り組み、1995年の第96回日本耳鼻咽喉科学会総会で「内耳性難聴の基礎的研究」と題して宿題報告を担当した。臨床では頭頸部がんを中心として耳鼻咽喉科・頭頸部外



写真1 大学スタッフ 集合写真

科疾患の治療に取り組み、その足跡は1999年に「筑波大学耳鼻咽喉科 草刈潤教授開講十周年記念論文集」として「耳鼻咽喉科展望」の別冊にまとめられている。

2002年には原晃が第3代教授に就任した。研究ではそれまでの内耳性難聴研究をさらに発展させ、2009年の第110回日本耳鼻咽喉科学会総会で「内耳性難聴の治療に向けて一病態モデルを用いたアプローチ」と題して宿題報告を担当した。臨床では県外を含めて幅広く症例を受け入れ、その足跡は2013年に「筑波大学耳鼻咽喉科 原晃教授就任十周年記念論文集」として「耳鼻咽喉科展望」の別冊にまとめられている。

### 診療グループの構成

2016年6月現在の大学勤務のグループ構成員は原教授以下、准教授2名、講師5名、病院講師1名、病院登録医1名、非常勤医師2名、クリニカルフェロー3名、大学院生1名、留学生1名の計17名である(写真1, 表1)。

学外では茨城県内の主な中核病院が大学の関連病院として機能している。常勤医を派遣しているのは10病院である。いずれも地域の医療を支えている基幹病院であり、特に筑波大学が創設した地域医療教育セン

ター・ステーション制度では筑波大学の教員として関連病院に勤務する医師が、その病院に元から勤務していた医師と協力して臨床・教育を担っている。この制度によって、研修医は充実した教育的指導ならびに地域の第一線病院の豊富な臨床経験を併せて得ることができる。新専門医制度では大学病院などが基幹研修施設となり、関連施設と緊密に連携して専門医の育成に

表1 大学勤務耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療グループ構成員

役 職	氏 名
教 授	原 晃
准教授	和田 哲郎, 大久保 英樹
講 師	田淵 経司, 西村 文吾, 田中 秀峰, 廣瀬 由紀, 中山 雅博
病院講師	林 健太郎
病院登録医	中馬越 真理子
非常勤医師	及川 慶子, 阪口 真沙子
クリニカルフェロー	宮本 秀高, 田中 晴香, 佐川 里恵子
大学院生	谷 紘輔
留学生	Le Quang

(2016年6月現在)



写真2 関連病院医長会議

当たることが求められているが、本学では従前からそのような体制で指導を行っている。関連病院はそれぞれ異なる特徴と得意分野を持っている。定期的に医長会議を開催し（写真2）、情報を共有し、一人ひとりの医師がより充実した研修を受けられるよう、きめ細かな配慮を行っている。関連病院などでの勤務、あるいは開業した医師を含めて、当グループの出身者はこれまでに62名となった（写真3）。

### 診療体制

月曜日、火曜日、木曜日に午前・午後で外来を開いており、主に地域からの紹介患者に対応している（表2）。当院は、2012年12月に新棟（けやき棟）がオープンしたため、手術室や集中治療室のベッド数も増加し手術件数も増えている。水曜日と金曜日それぞれ2列の全身麻酔手術枠があり、基本的にそれらの曜日にはほとんどのスタッフが手術に専念できるように体制を組んでいるが、他院からの緊急の依頼がある場合にはスタッフが臨機応変に対応している。

筑波大学では、設立の理念を受け継ぎ診療科ごとの垣根が低く、横の連携が密であることが大きな特徴となっている。より正確な診断のために放射線科との画像カンファレンス、治療に伴うトラブル低減のために頭頸部がん症例治療前の歯科口腔外科への口腔管理の

依頼、治療中の全身状態の改善を目指して栄養サポートチームとのNSTカンファレンスを行っている。拡大手術が必要な症例では、形成外科、消化器外科、脳神経外科、呼吸器外科などの医師との個別のカンファレンス、手術標本についての病理診断科とのディスカッション、QOLを高く保つための総合診療科緩和ケアチームとの協力など、患者さんを中心とした連携は外来・入院の別を問わず、枚挙にいとまがない。他職種との連携を含め、これらは日頃からの良好なコミュニケーションによって支えられている。

#### 1. 耳科領域

田淵講師、廣瀬講師を中心に診療を行っている。慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎を中心とする中耳疾患のほか、人工内耳手術も積極的に行っている。人工内耳を当院で施行するようになったのは2007年と比較的最近であるが、その後急速に症例数が増え、小児先天性難聴症例を含め、現在までの症例数は約50例である。乳幼児難聴外来は及川非常勤医師、中馬越病院登録医、阪口非常勤医師が中心となって診療を行っている。新生児聴覚スクリーニング後の学会認定精密聴力検査機関は県内に4カ所あるが、筑波大学では県内のおおよそ半分の地域からの症例に対応している。

研究では、前任の草刈教授の時代から、内耳、特に蝸牛の基礎研究が当グループの柱である。聴覚の重要



写真3 筑波大学同門会総会集合写真

表2 外来担当医師

	午前	午後
月	田淵 経司, 西村 文吾, 田中 秀峰, 中山 雅博, 中馬越 真理子	原 晃, 大久保 英樹, 和田 哲郎, 田淵 経司, 西村 文吾, 田中 秀峰, 中山 雅博, 中馬越 真理子, 宮本 秀高
火	西村 文吾, 廣瀬 由紀, 林 健太郎, 宮本 秀高	西村 文吾, 廣瀬 由紀, 林 健太郎, 宮本 秀高 補聴器外来
水		
木	和田 哲郎, 田淵 経司, 田中 秀峰, 廣瀬 由紀, 中山 雅博, 林 健太郎 乳幼児難聴外来	田中 秀峰, 廣瀬 由紀, 中山 雅博, 林 健太郎 乳幼児難聴外来, 補聴器外来
金		

(2016年6月現在)

な障害因子である強大音, 虚血再灌流, 耳毒性物質のそれぞれについて, 共通点と相違点を探求してきた. 近年では特に蝸牛の組織培養系を用い, 耳毒性物質による内耳障害のメカニズムの究明と, その予防ならびに治療法の開発を目指している.

臨床研究では, 信州大学を中心とした難治性聴覚障害に関する調査研究班に参加し, 特に急性音響性聴器障害と騒音性難聴については中心となって調査研究を進めている. また, 原教授が日本耳鼻咽喉科学会産

業・環境保健委員会の担当理事の立場にある. そのため, 騒音性難聴を中心とした産業保健分野では先駆的な取り組みとして地元の産業保健総合支援センターと連携し, 事業所からの相談を受け付けるなど, フィールドにも出て対策に取り組み, 厚生労働省にも働きかけている.

## 2. 鼻科領域

田中講師, 宮本クリニカルフェローを中心に, 通常

の副鼻腔手術から高難度の内視鏡下鼻・副鼻腔手術V型、機能改善を目指した外鼻形成術、さらには脳神経外科と合同での頭蓋底手術にも積極的に取り組んでいる。下垂体手術では耳鼻咽喉科が鼻内操作を行うことにより、鼻内の愛護的操作かつ良好な視野を確保し脳神経外科医の腫瘍摘出を助けている。一方、鼻副鼻腔腫瘍頭蓋底浸潤例では脳神経外科による開頭と鼻内視鏡手術の併用により根治性を高める拡大手術が可能となっている。

急速に適応が拡大しつつある鼻内視鏡手術において、従来の on the job training に頼らない手術手技教育の提供は大切なテーマであり、産業技術総合研究所と共同で内視鏡手術手技の技能研修方法に関する研究を行っている。指導医の高度な技量を若手医師が安全に学ぶために、患者模型を用いて手術操作をまねて学習するシステムの整備を進めている。

### 3. 頭頸部領域

西村講師、廣瀬講師、中山講師、林病院講師が中心となって治療を行っている。当科を中心に、放射線腫瘍科、放射線診断科、腫瘍内科、歯科口腔外科の専門の医師とともに毎週オンコロジーカンファレンスを開いており、個々の症例についてさまざまな立場から治療効果と機能温存の可能性が議論されている。このオンコロジーカンファレンスによって治療の選択肢を絞り込み、患者さんに提示し、方針を決定している。当院では、放射線治療は通常の Linac のほか、強度変調放射線治療、陽子線が使用可能で、γナイフやサイバーナイフも連携施設で対応できる。化学療法は化学療法・放射線治療同時併用療法を中心に用いており、分子標的薬の併用にも柔軟に対応している。手術では、拡大手術が必要な症例でも、関連する各診療科と協力して合同手術を施行し、根治性の向上ならびに機

能の可能な限りの温存を目指している。

難治性頭頸部がんに対しては、細胞レベルの選択的な放射線治療を目指し、放射線腫瘍科と共同でホウ素中性子捕捉療法 of 臨床研究にも取り組んでいる。従来の原子炉を用いる方法では医療への応用に限界があったが、加速器を用いた治療の実現が近づいており、今後さらに多くの症例に適用できるようになると考えている。また、治療成績の改善に向けて、栄養状態を含めた全身管理の重要性に着目し、経過に影響する因子の解明や予後改善のための方策を研究している。

### お知らせ

2017年6月10・11日（土・日）には、日本耳鼻咽喉科学会茨城県地方部会として日耳鼻医事問題セミナーを担当する予定である。2015年10月に医療事故調査制度がスタートし、医療安全への社会の関心もますます高まっている。新専門医制度でも医療安全は共通講習の必修項目の1つにあげられ重要視されている。有意義なセミナーとなるよう現在準備を進めており、皆様の多数のご参加をいただければ幸甚である。

### おわりに

原教授が就任して14年経過し、同門の医師も徐々に増え、研修医を派遣する関連病院もその多くが複数の指導医体制をとれるようになるなど充実してきている。人口当たりの耳鼻咽喉科医数が日本で最も少ない茨城県において、筑波大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療グループの果たすべき役割は極めて大きなものがある。構成員全員が一丸となって耳鼻咽喉科学の発展と、地域医療の充実に少しでも貢献できるように努力していく所存である。